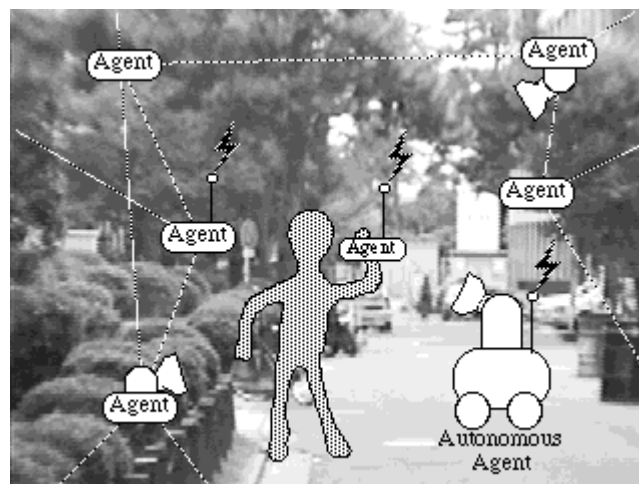


街に出よう！（石田亨）

1995 年頃だったと思う。石黒先生（当時助教授）が着任し、どういうコンセプトで研究室を作り上げていくかを相談した。まだ、Windows95 も出ていない頃だ。「これからはユビキタス」だとはさすがに言わなかったが、コンピュータールームでの研究はやめようと心に決めた。寺山修司が「書を捨てて街に出よう」と叫んだように、コンピューターを捨てて（当時は重かった）街に出ようと決意した。コンピューターを捨ててどう研究するのか、もとより成算がある訳ではなかったが、思えば、それが今の研究に繋がった。Wayback Machine に当時の Web が残っていた。それを見ると....

「街に出よう」を合い言葉に、街を理解し、街を記憶し、街で活動するための情報処理研究を始めようと議論している。人工知能、能動視覚、計算機ネットワークなどの技術を背景に、人間の住む世界に情報処理研究の場を移すことにより、情報処理の新たな可能性を探求したいと考えている。基本的なコンセプトは以下のとおりである。

- Intelligent Agent から Adaptive Organization へ
人間同様の知的なエージェントを指向するのではなく、多数の単純なエージェントにより柔軟な人間-機械システムを実現する。単純な情報処理機能を環境に埋め込み、分散的に情報を処理する組織を構成する。そうした環境の支援を受けて、個々人の情報処理活動が実現される。
- Groupware から Communityware へ
特定の人々からなるグループを支援するのではなく、不特定多数の人々からなるコミュニティを支援する。特にコミュニティの形成過程を支援することを特徴とする。
- Network Computing から Spatial Computing へ
計算機あるいはネットワークに閉じた計算環境から踏みだし、家庭、街角など生活空間での情報処理を研究対象とする。屋外での携帯端末、無線通信の活用を特徴とする。



おやおや、十分「ユビキタス」のようです。